

BATTLE BALLER

HARUKA

III

氷の美少女

1 波乱の雨

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第三集

氷の美少女

第1章

波乱の雨

作・ Ψ (Eternity Flame)

「今年は雨が多いねー。」

梅雨時(つゆどき)を前に、前例のない大雨が連日に渡って降(ふ)っている。そんな空を見上げながら沙織はため息まじりにそう言った。

「そんなコトより急がないと遅刻しちゃうよ！」

そんな沙織をさておき、登校(とうこう)を急かすはるか。陰気(いんき)な雨の日々に、気分まで下降気味(かこうぎみ)の沙織が少し寝坊(ねぼう)したため、気まじめなはるかは授業に遅れまいと焦っているようで、天候など気にもしていない様子。

「やっぱさーコレって地球があつたかくなってるせいかなー？」

「えっ!?!...もーッ、急いでよ！」

「あっ...ちよっとー。」

「何!?!...忘れ物でもした？」

「パン食べながら行っていーい？」

「もーッ...早くしないとホント遅刻しちゃうよ！」

朝食もロクに取らせてもらえないのかと、沙織は空腹に辛(つら)そうな顔をした。さすがに可哀想(かわいそう)に思ったのか、はるかは引き返すのを許(ゆる)した。しかし、パンをかじりながら一緒に登校するのが恥(はずか)しいのか、はるかはバスの中で、ムスツとしていた。大雨はやがて雷雲(らいうん)となり、空に鮮烈な光と轟音(ごうおん)を響かせ始めた。

「...うう...怖い。」

「ハハハ...こんなに大きくなったのに、はるかはまだ雷が怖いんだねー。」

雷の轟音に身を縮こませ畏(おそ)れるはるかを、あつけらかんとした感じで笑う沙織。チャン・リンシャンとの戦いで、雷を嫌と言うほど目にしていたのに驚いた風ではなかったが。それは壮絶(そうぜつ)な戦いの中で極度の緊張状態にあったからであろうか。

死線に身を置く日々。こんな他愛(たあい)もないひと時が、なんだかんだ言いつつも、はるかは好きであった。傘(かさ)を差しながらバス停へと駆ける二人を後ろから呼び止める者がいた。

「おい沙織ちゃん！」

その声の主は正友であった。

「あっ正友さん!?おはよーございまあーす。」

「やっぱり沙織ちゃんだ。おっ!?はるかも一緒だったのか。」

「“も”とは何よ。何か用なの?」

「いやっ、何もねえよ。」

「それじゃ、わたし達急ぐから。」

「おい、待てよ。オレも一緒にバスに乗るからな。」

「アンタ仕事は?」

「休みだよ。」

「ふ〜ん...こんな雨の日に街中(まちなか)にナンパでも行くつもり?」

「バカッ...んなワケねーだろがッ!...それよりも急がなくていいのか?」

正友の話に気を取られていたはるか。その間にバスが停留所に着いていた。

「あーッ!!」

はるかは慌てて駆け出した。沙織と正友も後を追ったが、はるかが先に行ってバスを喰い止めるだろうからと思い、ほどほどに小走りをしていただけであった。

「何とか間に合ったねー。」

「そだな。」

沙織と正友は仲良くそう言いあったがー

「んもうっ...なんでわたしがびしょ濡れになんなきゃならないのよ!」

はるかは自分達を引き留めた張本人(ちょうほんにん)である正友に怒りをぶつけた。

「...走ったからだろ?」

「誰のせいで走ったと思ってるのよ!」

「まあいいじゃんか。皆でバスに乗れたんだからよお。それにびしょびしょになったワケじゃねえんだから、固えコト言うなよ。」

はるかが怒ったのは雨に濡れたからではなく、髪の設定や身だしなみが乱れたコトに対してであったのだが。満員のバスで大声をあげるのはみっともなかったので怒りを鞆(さや)に納めた。

「ところで正友さんはどこに行くんですかあー？」

一瞬、思い詰めたような顔をした正友は、

「...最近な。街中で不審者(ふしんしゃ)が出没(しゅつぼつ)してるらしくてな。で、オレが治安を守るという名目でパトロールしてるってワケだ。」

と沙織の質問に答えた。

「へえ～スゴイですねー。」

「エヘヘヘ。いやあ～...まあ...そうかなあ...。」

「嘘でしょ。」

呆(あき)れた風な顔をしてはるかがそう言った。

「えっ!?!...なんで分かったんだ？」

「顔を見れば分かるわよ。」

「え～っ。嘘だったんですかー？」

沙織は、嘘をつかれたのが悲しいというか残念だと言わんばかりの視線を、正友に送った。

「うっ...いや、まあ...おいつはるか！」

「何よ。」

「お前の学校、その停留所じゃね？」

「そうよ。だからどうしたの？」

「じゃー早く行けよ。遅刻するぞ！」

「まだ停留所(ていりゅうじょ)に着いてないじゃない。」

「だから前の方に行っというて着いたらすぐ降りろよ！」

「なんでアンタがそんな事。指図(さしず)すんのよッ。」

正友は、はるかとは会話する事で、沙織の非難(ひなん)の視線を躲(かわ)そうとしていた。だが、正友が考えているほどには沙織は今のやりとりを気にしてはおらず、ほどなくしてバスがはるか達の学校の前に着いたので、二人は降りて行った。

「ふう～アイツ勘(かん)だけはやたら鋭くなって...まるで昔のまゆみ姉さんみたいだな。ま、それはさておき今日はドコに行こっかなあ♪」

正友は踊り出しそうな程のルンルンなステップで、街中(まちなか)のマックへと入って行った。しかし、あまり長居もせず、そそくさと店から出て来てしまった。両手にはテイクアウトの袋を抱え、顔はムスツとしていた。

「ちえッ...あの娘(こ)辞(や)めちゃったのかなあ...。」

どうやら正友にはお目当ての店員がいたようで、どしゃ降りの雨の中、足しげく通っているようであったが、その娘はいないので不機嫌(ふきげん)なようであった。

「ま、いっか。次行ってみよう♪」

誰に向かって喋(しゃべ)っているのか分からないが、正友はハンバーガーを食べながらそう呟(つぶや)いて気分を立て直し、次の場所へと歩いて行った。

その頃—

「ええ～ッ!?!」

はるか教室で驚(おどろ)きの声を上げていた。

「せっかく学校に来たのに...。」

ホームルームで担任が開口(かいこう)一番(いちばん)に、大雨洪水警報の為に休校になったことを告げ、はるかは残念がっていた。他の生徒はラッキーといった感じで喜んでいたが。一般の人間とは違った生活を送っているはるかにとって、学校こそが平凡(へいぼん)な日常に浸(ひた)れる安息(あんそく)の場であり、何気(なにげ)ない周りの雰囲気(ふんいき)が好きでもあったのである。

だが、担任は大雨なのであるから真っ直ぐに家路につくようにと念を押すと、そっけなく教室を後にした。

「はあ～...何だったんだろ。」

学校での平凡な日常を満喫(まんきつ)できないなら、せめて街にでも繰(く)り出して社会の中に佇(たたず)んでみたかったが、それすらも許されないとわれ、がっかりした様子のはるかであった。

「しょーがないなー...はるかあ、パフェでも食べに行こっかー？」

「えっ!?!でも...。」

先生に見つかりとマズイと言いたそうなはるかであったがー

「大丈夫だよー。バスが来るのを待ってるんだって言えばさー。」

そう言って、沙織は強引にはるかの手を引き喫茶店へと足を運んで行った。

「すんげえ雨だな。」

はるか達がバス停へ向かおうとしている頃。あまりにももの大雨に、正友も用事を切り上げようとしていた。

台風でもないのに異常な雨の量。朝方にはこんな事態に陥るとは夢にも思わなかったのだが、別に急ぐ用事でもなかったので引き返そうとしていた。長靴(ながぐつ)を履(は)いていなかったのも、足元が濡れないようになるべく屋根のあるアーケードを選んで歩いていると、自然と自分が降り立ったバス停とは違う方向へ向かう事になり、はるか達の通学路へと近付いて行った。

「うー...たまらん。」

正友が歩いているその先には、喫茶店でパフェを食べるはるかとは沙織がいた。甘い物が大好きなはるかは、パフェを一口食べると、美味しさと口中に拡がる快感に唸(うな)っていて、さっきまで来るのをためらっていたのが嘘のような変貌(へんぼう)ぶりであった。

「来て良かったでしょお？」

「うん。」

「はるかは真面目すぎるんだよー。先生に見つかったって何とでも言い訳できるんだからさー。」

「うーん。それは...そうだね。」

頬杖(ほおづえ)をつき、首をかしげたはるかの横目(よこめ)に、派手(はで)な傘の絵柄(えがら)が映った。

「あれっ!?!」

まさかとは思ったが、見覚えのある傘を持ってアーケードを抜け出た男の姿を眼で追うと、やはりその主(ぬし)は正友であった。

「どうしたのお？」

「正友が向こうで歩いてるの。」

「えっ!? あっ... ホントだあ。」

ざんざん降りの雨が道を隔てた向かい側だった為に見え辛く、沙織は席を立てて喫茶店の窓の先を覗(のぞ)き込むような格好(かっこう)をした。

「やだ、パンツ見えちゃうよ！」

横窓に沿(そ)う座席から立ち上がり、窓に向かい合(あ)って外を見る姿勢(しせい)は、店内の他の客に向(む)かって、お尻(しり)を突き出すような前傾(ぜんけい)姿勢(しせい)となり、無防備(むぼうび)ではしたないと、はるかが沙織(さおり)をたしなめた。

「...でもアイツ何(なに)やってんだろ... ホントに訳(わけ)分(わ)かんない。」

「雨がヒドイから正友(しょうとも)さんも帰(かえ)るんじゃない?... 食べ終わ(おわ)ったら驚(おど)かしてみようよお。」

そんな話を(話を)しながらパフェ(パフェ)を食べ進(すす)めるはるか(はるか)と沙織(さおり)の脇(わき)に、一人(ひとり)の男(おとこ)の影(かげ)が近(ちか)付(つ)いていた。

「あのおーすみません。」

男(おとこ)はがっちりとした色白(いろしろ)の男(おとこ)であつた。

「...何(なに)でしょうか？」

見知らぬ男(おとこ)の姿(すがた)に戸惑(戸惑)いながらも、真面目(まじめ)に受け応(こた)えをするはるか(はるか)。男(おとこ)は名刺(めいし)(めいし)を渡(わた)すと、伍籐(ごとう)と名乗(な乗)った。

「フリージャーナリスト?...」

目にした事(こと)のない名刺(めいし)の肩書(かたが)きに、訝(いぶか)しく思(おも)いながら男(おとこ)を見返(みかえ)すはるか(はるか)。

「いやね。この前(ま)ちょっと偶然(ぐうぜん)なんですけど見(み)ちゃったんですよ。」

「何(なに)の事(こと)ですか？」

「いえね、それが私も未(いま)だに信じ(信じ)られないんですが。文化(ぶんか)の森(もり)の公園(こうえん)でビッキー・チャオ(チャオ)似(に)のお姉(お姉)さんとあなた達(あなたたち)が何かスゴ(スゴ)い事(こと)やってたでしょ？」

「おっしや(おっしや)ってる事(こと)の意味(い)が分かりませ(わ)ん。」

「トボけないで下(くだ)さいよ。私(わたし)、見てた(み)んですから... それで(それで)です(です)ね。あなた(あなた)の身辺(しんぺん)を探(たず)ねてみますと、何か怪(あや)しい噂(うわさ)をチョコチョコと耳(みみ)にしまし(しま)て... これは何か特(とく)ダネ(ダネ)の匂(にお)いを感じ(かん)じたワケ(わけ)で。是非(ぜひ)、取材(しゅざい)をさせ(させ)てもら(もら)いたいと思(おも)った(おも)ったのですが... いか(いか)がな物(もの)かと思(おも)いまし(まし)てね。」

「...勝手にわたしのコトを聞き込みしたんですか!?!」

はるかは静かに怒りをあらわにした。

「あっ...すみません。コレは些少(さしょう)ですが、勝手にあなたを調べたお詫(わ)びの印です。受け取って下さい。」

はるかの怒りにビビった伍籐は、そう言って紙の封筒(ふうとう)をテーブルに差し出した。封筒には紙幣(しへい)の印刷(いんさつ)が透(す)けて見えていた。

「どうでしょう。今後とも取材させてもらえませんか？」

「こんな物は受け取れません！わたしのコトには金輪際(こんりんざい)かかわらないで下さい。」

そう言うと、パフェを全部食べきらない内に、はるかはその場を立ち去ろうとした。

「はいはい...分かりました。もう立ち去りますから機嫌(きげん)を悪くさせちゃってすみませんでした。それでは...」

立ち去ろうとしたはるかを伍籐は引き留め、平身低頭(へいしんていとう)に謝(あやま)り立ち去ろうとしたが、取材をしないと発(はっ)しなかったのもう一度念を押そうとしたのだが。走り去った伍籐に、はるかはそれをできずにいた。

「あの人、お金忘れて行ってるよー。」

「えっ!?!...ホントだ。」

「うわー...結構入ってるよ。」

「ちょっと、勝手(かって)に空けちゃダメでしょ！」

「これ、どーするのー？」

「店員さんに渡して帰りましょ。」

「え〜...もったいないなー、パフェいっぱい食べれるのにい。」

そんな沙織の言葉に耳を貸さず、レジで会計を済(す)ませようとするどー

「お会計(かいけい)は頂いております。」

と言われた。オゴられる謂(いわ)れがないので、はるかは支払いの分も封筒に入れ店員に預けようとしたが、それは出来ないと言われたので、仕方なく預かっておく事にして店を出ることにした。

「せっかくの一張羅(いっちょうら)の靴が...台無しだな。」

アーケードを出た正友は、はるか達より一足早くバス停近くまで来ていた。豪雨の降りつぐ路面(ろめん)に、水びたしとなった新品の靴に、思わず出てしまう独り言。足元を気にしながら歩く正友の無防備な懐(ふところ)に、いきなり何かの影が飛び込んできた。

「おっ!?うっ...」

正友の腹部に突っ込んだ影。気を抜いていた正友はまともにぶつかってしまい、苦しそうな息を漏(も)らした。

「痛え〜...ん!?女の子じゃなか。」

走り込んできた影の正体は少女であった。背丈(せたけ)からして小学生の高学年くらいであろうか。正友の姿が見えないほど夢中で走っていた少女。ぶつかった瞬間(しゅんかん)に人だと認識した正友は、それが少女だとまでは気づかなかったが、殺気(さつき)はなかったので、怪我(けが)をしないように受け止めていた。

だが、少女は正友に気づかないのではなく、助けを求め飛び込んだのだと、じきに判明(はんめい)する。

「おい、どうしたんだ?お嬢ちゃん。」

少女は無言(むごん)で正友にキツくしがみつきの、何かにおびえているようであった。不思議に思った正友だが、雨音に交じり幾(いく)つかの靴音(くつおと)が聞こえたので、少女の走り込んできた先を見据(みす)えると、4人ほどの男が続々(ぞくぞく)と、正友の前に姿を現した。

「その子を渡してもらおうか。」

全身黒づくめで、同じ髪型にサングラス。まるでマトリックスのエージェント・スミスのように、体型までもがそっくりの4人の男の中の一人が、少女の姿を確認すると高圧的(こうあつてき)な発言で正友にそう迫(せま)った。

「おい、お嬢(じょう)ちゃん。このオッサンら知り合いか?」

男の威圧(いあつ)など無視した正友が少女に問いかけたが、少女は正友にしがみついたまま離れようとせず、ただ首を横に振り、男達とは無関係だという意志表示(いしひょうじ)をただけであった。

「この子は知らねえって言ってるぞ。お巡(まわり)りさん呼ばれたくなかったら、さっさと消えろ！」

「力づくでも返してもらおう。」

男達はそれぞれ得物(えもの)を取り出すと、横一線に並び身構えた。

「ふーん。同じような格好してるけど、武器は違うんだな。」

正友は全く動じていない。

「もう一度だけ言う。その子を渡せ！」

その自信に男達は逆に臆(おく)しているようであったが、数を頼(たの)みに脅(おど)しかけていた。

「早くかかって来いよ！そんな物持ってるのが見つかりでもしたら、警察(けいさつ)に捕まっちゃうぜ？」

正友は、しがみついた少女をそっと自分の後ろに立たせた。少女を守るための行為だったが、自身はマックの紙袋を片手に抱えたまま構(かま)えもしないでいた。

「うぬう〜…」

「“うぬう〜”じゃねえよ、さっさとかかって来い。讃岐(さぬき)の山ピーこと、このオレ様がお前らのダサい服装(ふくそう)をチェックしながら、戦い方を教えてやるぜ！」

正友の威圧感(いあつかん)に戦うのをためらっていた男達だが、あまりにももの侮辱(ぶじよく)を受け、怒りにまかせて襲いかかってきた。

だが、4人同時に駆け出した矢先(やさき)に、いきなりその内の一人が気を失い倒れこんでしまっていた。

「まず戦い方だが、スキが多くて話にならない。」

正友は腰と財布を結びつけたシルバーのチェーンを取り外し、まずそれで男の一人を打ちすえていたのであった。

あまりにももの早さで繰り出したので、男達には見えないでいた。振り抜いたチェーンは閃光の如き疾風(はやて)となって蛇行(だこう)し、残りの三人の男の顔をも殴りつけノックアウトしてしまった。

「ぐぬうおおお…」

「次にファッションチェックだが、上下(じょうげ)を黒で統一したのは最悪のセンスだな。黒着とけば無難(ぶなん)だとでも思ってたの？ウケるわ〜。」

少女を止(とど)め、悶絶(もんぜつ)する男達の輪(わ)に入り込み、そう言ってからかう正友。

「ファッションの基本はだな。まず上下の色に濃淡を付ける。インナーは上着の色が暗ければ明るくするといった具合にな。聞いてんのか？」

そう言いながら、全員が立ち直りきれない内に、一番に立ち直ろうとした男を打ち倒した。

「次にだな。派手な衣装を付けた場合は、アクセサリや時計といった装飾品は控える。要するにだな…全体のバランスが大事なんだ…よッ。」

正友が語ってる間に男の中の一人が、ヌンチャクで攻撃してきた。しかし、正友は喋(しゃべ)りを止める事なく、難(なん)なく攻撃を躲(かわ)しながら、チェーンでトドメを刺した。

「死ねッ！」

最後に残った一人がそう叫びながら背後から正友を鎖鎌(くさりがま)の刃で狙ったのだが…

「何ッ!？」

男は思わずそう叫んでしまっていた。何故なら、確かに振り向きざまの正友の胸に刃を突き立てたつもりなのに、いつの間にかそれがメガマックに入れ換(かわ)っていたからである。

「…お前、ドコに行ったらそんなモン売ってたよ？」

呆れた口調で正友がそう言った。なりふり構わず鎖鎌を振り回してきた男であったが。正友はその攻撃を紙一重(かみひとえ)で躲すと、一気に距離を詰め、乱闘中にサングラスの外れた男の裸眼(らがん)に、マックの紙袋から取り出したナゲット用の辛子(からし)ソースを浴びせた。

「ちなみにファッションチェックをしながら闘ったのは、“山ピー”と“ピーコ”を掛けたって分かったか？」

正友がそんな事を言ってる間に撃退された4人の男達は、よろめきながらも立ち上がった。

「まだやんの？」

「クソッ...憶(おぼ)えてろ！」

男達はそんな捨てゼリフを吐(は)きながら、慌(あわ)てて立ち去った。追跡(ついせき)しようとした正友だが、少女がまたもしがみつ、機会を逸(いっ)してしまっていた。

変な奴らだったが、大した脅威(きょうい)とも思えなかったので、正友はそのまま捨て置く事にし、少女の方へ振り向き不安を取り除こうとした。

「おーしおし...もう大丈夫だからなお嬢ちゃん。ところでどこから来たんだ？」

屈(かが)み込んで少女と視線を合わせ、頭を撫(な)でながら優しく話をしようとした正友。そこに、喫茶店から出て歩いてきたはるかが出くわした。

「正友!!アンタ何やってんのよッ。」

「何って...。」

いきなりのはるかの登場に、どう説明していいか困る正友。その態度を不審(ふしん)に思い、誤解したはるかが—

「まさかこんな小さな子に、手を出そうとしてたんじゃないでしょうね！」

と怒り気味に問い詰めた。

「ば、馬鹿ッ...違うよ！この子が暴漢(ぼうかん)に襲われてだな、助けたんだぞ！」

「本当にそうなの？」

はるかは正友を無視し、膝(ひざ)を曲げて少女に近付き優しく問いかけると、少女はコクリと頷(うなづ)いた。

「そら見ろ！分かったか!？」

「あーはいはい。」

「なんだよ！そのいい加減な感じはよッ!!」

「そんな事より、この子を襲った暴漢はどうしたの？」

「ん!?...どっか行った。」

「どこか行ったって...なんで捕まえなかったのよ！」

「だってよお、この子が怖がってたからほっとけなくてよお...。」

「まあ...いいわ。で、どうするの？この子。」

「うーん...どうすっかなー。」

「警察に保護してもらえないでしょ。」

少女は首を横に振り、頑(かたく)なにはるかの提案(ていあん)を拒(こぼ)んだ。そして正友の足にしがみついたまま、その理由を話そうとしなかった。

「うーん...困ったわねえ。」

「何か警察に行くとマズイのかもよー。」

沙織はそう言うが、そのマズイ理由がどういう物なのかはつきりしない事には、どう対処(たいしょ)していいか分からない。幼い少女が嫌がるのを無理に連れて行く訳にも行かず、ひとまず濡れて冷えきった体を温めてあげ、精神状態(せいしんじょうたい)が落ち着くのを待とうということで、連れて帰る事にした。

正友が言うには、少女を襲った男達は、異様(いよう)な格好をしてたというので、もしかしたら何か巨大な権力などから弾圧(だんあつ)を受けているから警察さえも信用できないのかもと、沙織が現実味のない想像をし、自分達でよく少女の話を聞こうと強く主張したのが、そういう運びにしてしまっていた。

沙織は映画やドラマのような世界に憧れ、むしろ少女がそういう面倒事(めんどうこと)に巻き込まれていて欲しいと思っているようにさえも見える。対照的に、はるかはそんな事がある訳がないと冷めていたが、とりあえず人道的(じんどうてき)に助けてあげねばと思っていたくらいなのだが、頭の片隅(かたすみ)には正友の言った怪しい男達の事も引っかかっていた。

沙織の素振りとは逆に、少女が妙(みょう)な事に巻き込まれてなければいいのにと、はるかは思っていた。少女を加えた4人で帰るバスの道中。沙織はそんなはるかの胸中を察し、自分が浮かれていたことを反省していた。

「とりあえず帰ったらこの子どうすんだ？」

「体が冷えきってるみたいだから、お風呂に入れてあげないと...」

はるかは正友の問いにそう答え、バスを降りると鮎吉の家に少女と共に向かった。

「おお...どうしたんじゃ?はるか。」

はるかが見知らぬ少女を連れてきたのに驚(おどろ)く鮎吉。

「話は後でね。この子をお風呂に入れてあげないと...。」

そう言うてはるかは風呂場へと少女を案内し、少女にシャワーを浴びさせ、その間に近くのスーパーに走り、替(か)えの下着を買ってきた。

帰ってくると鮎吉に事情を説明しようとしたが、沙織と正友が先に秀樹を連れて来ていて、鮎吉と4人で話をしていた。

「うーむ。そういう事だったのじゃな。」

「師匠、どうすればいいのでしょうか？」

そう言うて、秀樹が鮎吉に意見を仰いだ。はるか達の間では、常にこうして年長者同士が話しをして物事を決める。年下の者は、何か困った事があれば必ず目上の者に相談をするのである。

しかし、鮎吉も経験のない事態に少女が立ち直るまで待てとしか言えずにいた。難しい事は年長者に任せ、はるかは風呂場へ何度も行ったり来たりした。

少女の存在は、可愛い妹が急に出来たような気持ちをはるかに起こさせ、世話が焼きたくてもしようがないようであった。タオルの置き場所や湯加減を聞いたり、着替えを持って行ったりと、一発に済ませればいいのに、何度にも分けて少女の元へと向かい、彼女を気にかけていた。

「おーい。手伝ってやろうか？」

何度も往復するはるかを見て、正友はそう言ったが—

「お風呂入ってる女の子の何を手伝うのよ。」

と、はるかが言う—

「背中でもお流ししましょうか？」

と冗談っぽく言った。しかし、

「アンタそんな趣味(しゅみ)あったの？」

はるかは軽蔑(けいべつ)の視線で、正友に冷たい言葉を浴びせた。やがて少女は風呂から上がり、はるかに導(みちび)かれ、みんなのいる居間(いま)へと来た。

「わあ！可愛(かわいい)いねー。」

はるかが小さい時に着ていた服が鮎吉の家に残っていて、そのお下がりを着ていた少女はとても愛らしく、その姿を見た沙織が思わずそう声に出していた。

「はるかの小さい頃みたいだねー。」

「えっ...そう？」

「でもはるかの小っちゃい頃は、もっと明るくて元気だったかもー。」

「そりゃ、しょうがないわよ。怖い目に遭(あ)ったんだから...あなた名前はなんて言うの？」

はるかが優しく少女に語りかけると、ずっと黙りこくっていたその少女が小さな声で応えた。

「...詩音(しおん)。」

それはとても掠(かす)れた小声であったので、一番近くにいたはるかにしか、きちんと聞き取れないでいた。それも、詩音の口元に耳を寄せて、やっと聞こえる程度(ていど)の弱々(よわよわ)しさであった。

「へえ～詩音ちゃんて言うんだ。綺麗(きれい)な響(ひび)きだね。」

「何ッ!？」

はるかが、ソファーに座るみんなに聞こえるように詩音の名を復唱(とたん)した途端(とたん)、秀樹が驚き立ち上がっていた。

「...どうしたのお兄ちゃん？」

「い、いや...八大心拳の中に氷の力を使う者がいて、その者の名が確か詩音と言ってたよ
うな...。」

「まさか...考え過ぎだわ。」

「そうじゃとも。こんな小さな子供が、お主の耳にも入ってくるような有名な拳士(けんし)で
ある筈(はず)がないわ。第一、この子からは内力[メキド]を感じん。そうじゃろ？」

鮎吉の言う通りで、聴勁(ちょうけい)を用いても、詩音からはメキドの反応がなく、秀樹は頷く
しかなかった。

「ところで詩音ちゃん。お年はいくつ？」

「...。」

「お父さんやお母さんはどうしたの？」

「...。」

はるかが続けざまに問いかけたが、少女は自分の名前以外に何も答えようとはしなかった。

「...困ったな。」

どうしたものかなと言った感じで、はるかが周りを見渡した。

「う～ん...誰かに追われてるみたいだけど、警察に行くのは嫌がってるし、連絡先も所在(しよざい)も判(わか)らないし。もうちょっと落ち着いてちゃんと話せるようになるまで、様子を見るしかないかな。」

考えられる手立(てだ)てでは、今、秀樹が言った案(あん)くらいしか見つからないでいた。

「でも、誰がこの子の面倒(めんどう)を見るのー？」

「あたしが見るわ。」

「オレが見るよ。」

はるかとは正友が同時に手をあげた。

「アンタじゃ、詩音ちゃんのお世話なんて出来ないわよ。」

「この子はオレを頼ってきたんだ。だからオレがちゃんと面倒を見るっつーの！」

揉(も)めかけた2人を見て、秀樹が即座(そくざ)に折衷案(せっちゅうあん)を出した。

「お前達、二人で見ろ。」

「どういう意味なの？お兄ちゃん。」

「はるか。お前が学校に行ってる間、誰が詩音ちゃんを見るんだ？」

「あっ...それは...。」

「詩音ちゃんは誰かに狙(ねら)われてるみたいなんだろう？だったら交代で見張(みは)ってないとな。」

秀樹の言う事はもっともであった。

「洋ちゃんや功ちゃん達にも分担(ぶんたん)して見張ってもらえばいい。お前達だけだと大変だろうからな。」

「分かった。伝えとくよ。やっぱ子供にはお父さん役にお母さん役もいないとな。な、お母さん！」

「何ワケの分かんないコト言ってるのよ。」

正友の思考回路は独特(どくとく)だった。はるかはその独特で理解不能な言葉を、オブラートに包む事なくストレートに斬(き)って棄(す)てた。

「...ところでアンタ、何処(どこ)に住んでるの？」

「ん!?お前んトコの寮(りょう)の一階だよ。言ってなかったっけ？」

「えーッ!？」

はるかはショックを受けたようであった。

「なんでそんなに驚くんだよ。」

「何号室なの？」

「14号室だよ。」

「え〜ッ...それじゃ、あたしの部屋の真下じゃない。」

「そうだよ。」

はるかはとても嫌そうな顔をした。

「なんだよ！その汚い物を見るような嫌そうな目つきはッ。」

「だって...なんか...ねえ。」

はるかは秀樹の方を見た。

「そうだな。」

「何が“そうだな”なんだよ、秀さん！」

「いや...言いにくいんだが、なんかお前の部屋から何か出てきそうじゃないか。例えばデッカいゴキブリとかさあ...。」

「そうそう。」

「二人して何だよ！オレの部屋にはゴキブリなんていねえよッ。」

「ゴキブリも生息(せいそく)できないほど、お前の部屋は劣悪(れつあく)なのか？」

「いい加減にしてくれよ秀さんッ！！ゴキブリが生きれないほど汚い部屋って、どんな部屋だよ。 “部屋が汚れてんじゃないのか？”って普通に訊(き)いてくれればいいのによお...。」
「ハハハ...冗談だよ。はるかは年頃だから、ちょっと嫌なんだろう。ま、とにかくそういうコトだから、しっかりやるんだぞ。」

旋毛(つむじ)を曲げ、膨(ふく)れっ面(つら)になった正友。その手を引くようにして、はるかが秀樹の指示で詩音を連れて寮へ向かった。

「まだイジけてるの？」

「イジけてねーよ！」

そんなやりとりを繰り返しながら、自分達の寮へとはるか達が戻ると。洋一と功一が正友の部屋の前にちょうど来た所であった。

「話は聞いているよ、はるかちゃん。これから僕達が君達の見れない間は、詩音ちゃんをガードするから。」

「よろしくお願いします。洋一お兄さんに、功一お兄さんも。」

洋一と功一は、秀樹の連絡(れんらく)を受けていて、正友の部屋を片付け出した。

「さすがお兄ちゃんの根回(ねまわ)しは早いわね。」

はるかのその言葉に、正友も頷いていた。関心している内に、片付けも終わりが近づくと、大介と広介がやって来た。

「大ちゃんさん、どうしたんスか？」

「え、い、いやっ...正友の部屋を広くしろって、秀さんに言われてな...。」

正友の問いに大介はそう答えると、ゆらりとした動きで正拳を打つような構えをし、隣部屋との壁に向きあった。

「あれは“真空掌かめ波”!？」

「“かめ波”？...それはどんな技なの？」

はるかの問いかけにも、正友は大介の繰り出そうとする技に気を取られてるようで、応(こた)えるまでに少し間が空いてしまっていた。

「“かめ波”は、圧縮された“気”を一気に放出する技だ。オレ達の持つ特殊な力とは違うが、発勁(はっけい)の技術の最高峰(さいこうほう)とされる高等奥義(こうとうおうぎ)だ。有名なのは百歩神拳(ひゃっぽしんけん)という名で知られてるが、人間の成(な)せる間接攻撃で、バトルボールに次ぐ威力(いりよく)を持つ。オレ達の力は、神霊的(しんれいてき)な血統(けつとう)から受け継(つ)がれた先天的(せんてんてき)な才能(さいのう)による要素(ようそ)が大きいが、この技は、スゲエ修練(しゅうれん)の果てにこそ得られるという点が大きな違いだ。」

滅多(めった)と見られない大技に、正友は子供のように好奇心旺盛(こうきしんおうせい)に瞳(め)を輝(かがや)かせている。

大介はボーッととして、緊張感のない顔を普段(ふだん)はしているが、この時ばかりはとても集中していて、だらりとした動きにも鋭い目つきをしていた。両腕の振りで太極(たいきよく)を描くと、再び腰元(こしもと)へと腕を引き、両の掌(てのひら)に溜(た)まった“気”を同時に壁へ向かって突き出すと、壁に大きな穴が開いた。

「スゲエ!!さすが大ちゃんさんスね。」

「あ、あ...そう？」

大介はもう一つ隣の壁も壊し、全員で粉々(こなごな)になった壁の瓦礫(がれき)を掃除(そうじ)すると、1ルームマンションが三つ連なり豪華(ごうか)な分譲(ぶんじょう)マンションみたいになった。

「これなら四、五人は住めるわね。でも、勝手にこんな事していいのかしら。」

はるかがそう言うと、すでに秀樹が寮を管理する病院の会長に承諾(しょうだく)を得ていると広介が言った。部屋の補強(ほきょう)は広介が中心となり手分(てわ)けして終わると大雨が止み、残りのゴミ出しもはかどった。全てを終えると、すでに日暮れになっていた。

「メシにしようぜ。」

昼はコンビニの弁当で済ませていたので、正友が、かなり空腹そうにしている、そう夕食を急かした。はるかが手際(てぎわ)よく料理を作り、みんなでそれを食べる事にした。

「詩音ちゃんは、年はいくつになるの？」

朝方の事件から随分(ずいぶん)と時間も経過し、詩音も落ち着いたようであったので、食欲も少し出てきたのを頃合いとみたはるかが、そう言って探りを入れてみると—

「...分からない。」

小さな声で、そう詩音は答えた。

「分からない？...記憶がないのかしら...。じゃあ、お父さんとお母さんの事は覚えている？」

「...分からない。」

「...そう。」

「こりゃあ、ちょっと落ち着くまで時間がかかるな。まあ、この素敵なお兄ちゃんが、ちゃんと面倒みてあげるから心配しないでな！詩音ちゃん。」

正友がそう言って胸を張った。

「おじちゃんもそう言ってるから、心配しないでゆっくり思い出してね。」

はるかの言葉に、正友が敏感(びんかん)に反応した。

「おい、おじちゃんはねえだろ！」

「詩音ちゃんから見れば、おじちゃんよねえ。」

「同意(どうい)を求めるな！じゃあ秀さんなんかおじいちゃんか？」

「なにムキになってんのよ。」

「お前は先輩(せんぱい)を立てるつつう事を知らねえらしいな。なんで、オレをいつも小馬鹿(こばか)にすんだよ！」

「あんたが馬鹿なコトばかり言うからでしょ！」

「それはだなあ。お前や秀さん達を和(なご)ませる為にやってんだよ！お前はホント分かってねえなあ。」

「女の子のお尻(しり)ばかり追いかけてるのが、何でわたし達を和ませるコトになるのよ？」

「おまっ...お前はアホかッ。オレが女の子ばっか追い回してるなんて、お前が勝手に思ってるだけだろ？オレだって色々やってんだよ！」

「何をやってんのよ。」

「そりゃ...アレだよ。みんなとの親睦(しんぼく)を深める為にだな...プレステいっしょにやったり、合コンやったりだな。」

「合コンとゲームね。それにナンパもでしょ？」

「な、何を根拠(こんきよ)に...そんな事を言ってんだよ！」

「じゃあ、何しにこの大雨の中、街まで行ってたのよ？」

「うっ...それはだな...。」

正友の目が泳いでいるのを、はるかは見逃さなかった。

「やっぱそうじゃない。要(よう)するに、アンタのやってる事っていうのは、ゲームオタクにナンパでしょ！キモチわるい。」

「キモいって...お前な！んな事言ったら、秀さんなんて変態だぞッ。去年の年末なんか、レコード大賞の司会でエビちゃんが出てて、昔の受賞曲を振り返ってるVTRで、その歌をエビちゃんが口ずさんでるのが、テレビに映ってたらだな。一緒にそれを口ずさんで、ニヤニヤして連帯感(れんたいかん)を味わうプレイみたいな事やってたんだぞ。それは気持ち悪くねえのかよ！」

熱く語る正友に対し、はるかは何も反論(はんろん)しなかった。しかし、それは正友の言葉が正しいからではなかった。

「正友...後ろ。」

まだ他にも言いたそうな正友に対し、はるかは小さな声で、そうとだけ喋(しゃべ)った。

「ん？後ろが何なんだよ。はぐらかしてんじゃねえよ...」

そう言って、正友はまだ話しは終わってないと言おうとしたが、はるかの表情を見て言われた通り振り返ると、そこには秀樹が立っていた。

「げっ!?!...秀さん...いつからソコに？」

「俺がヘンタイって辺(あた)りからだな。」

「い、いや...それは言葉のアヤで...。」

かなりうろたえる正友。だが秀樹はさっぱりとしていて、はるか達の食卓に差し入れの料理を置いた。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

「ところで詩音ちゃんは何か話したか？」

「それが...記憶喪失(きおくそうしつ)みたいなの。」

「そうか...まあ、今日一晩(ひとばん)は様子(ようす)を見るところ。じゃあ“変態”は仕事に戻るとするかな。」

「秀さーん...誤解(ごかい)だよお...。」

正友はすごく困っているようで、そう言って泣きを入れた。

「お前、なんで早く知らせねえんだよ！」

正友が、小声ではるかにそう耳うちをした。

「わたしが瞳で合図したのに、アンタが気づかなかったんでしょ！」

秀樹は何も言わずにすんなりと帰った。すると、広介や功一達が一斉(いっせい)にどっと笑いだした。皆が笑っているのだから、詩音もつられて笑顔を取り戻していた。

「あ、笑った。良かった。」

笑い声こそ出なかったが、少し明るくなった詩音を見て、はるかは安心してそう言った。

「良くねーよ...どうしよっかな〜...」

「いいじゃない。詩音ちゃんが喜んでくれたんだから。」

「馬鹿ッ。お前、秀さん怒らすと怖えーんだぞ！チクチクとしばらくイジメられるんだからな...。」

「こんばんは！」

いつの間にか来ていた秀樹とは対照的に、元気いっぱいので、美優(みゆ)が玄関(げんかん)のドアを開けて入ってきた。

「あら、美優ちゃんじゃない。どうしたの？」

「お兄ちゃんが、私と同じ年くらいの女の子が迷子になって困ってるから、話し相手になってあげなさいって言われたから来たよ。」

「そう。偉(えら)いわね。」

美優は、自分の母よりも若く見える秀樹を“お兄ちゃん”と呼んでいる。はるかの問いにそう応えた美優は、詩音の隣の食卓の席についた。

「はじめまして美優で一す。お姉ちゃんのお名前教えてえー。」

美優は、気さくに詩音に話しかけた。記憶を失くしているらしいので、あまり受け返答も出来ないではいたが、詩音も年の近い美優が来て、少しリラックスできているようであった。

「美優ちゃん、ご飯は？」

「まだー。みんなが食べてるから、いっしょに食べて来なさいって言われたよ。」

「うーん...でもご飯がなくなっちゃったんだけど、どうしようかなあ...。」

「はるかお姉ちゃん、お兄ちゃんが差し入れ持って来てくれてたんでしょ？それ温めてー。」

秀樹の差し入れは“おでん”であった。はるかは食卓にコンロを置いて、“おでん“を鍋(なべ)へと入れ、火にかけた。

熱々(あつあつ)におでんが温まると、正友が好物なので嬉しそうに箸(はし)を手に顔を近づけ、一番好きな大根から取り出そうとすると、美優も箸を鍋に浸(つ)けていた。正友は大根を掴(つか)み出したが、美優の方は、仲々(なかなか)お目当ての具(ぐ)にありつけないようであった。

「正友ー。ジャガ芋(いも)取ってー。」

「正友じゃねえだろ！正友兄ちゃんだろ。」

「お兄ちゃん、取ってー。」

「お、珍(めずら)しく素直じゃん。しょうがねえなー...どれどれ。」

正友が取り出そうとしたがジャガイモらしい手応(てごた)えが箸になかった。

「そんな搔(か)き混ぜたら、グチャグチャになっちゃよ。ココだよ。」

美優が箸でジャガイモの沈む場所を指したので、顔を近付けて正友が確認しようとする。美優が急に箸先をおでんのダシに浸けた状態から引き返し、弾(はじ)かれた熱々のダシが、数滴(すうてき)ばかり正友の顔にかかった。

「熱ちイツ!?...何すんだよ!!」

「あーゴメンゴメン...ヘンタイの姪(めい)っ子だから、お箸が変な方向に行っちゃった。」

「くッ...お前、秀さんに言われて来たな...どおりでタイミングよく来ると思った。ちえツ、ほんと陰湿(いんしつ)なんだから...。」

「お兄ちゃんは陰湿な変態なんだあ...今度会ったら伝えとこ。」

「うわああー...ち、違うよ! 言い間違いましたあ。」

「聞こえなーい。」

「今度、おもちゃ買ってやるから...それで、な!」

「ホント!?じゃあ聞こえなかった事にしてあげる。」

「ふう〜...。」

どっと疲れた感じの正友に、またみんながこらえきれずに笑い出していた。正友をげっそりとさせた美優の行為(こうい)も子供らしい物で、詩音の気持ちを落ち着かせるにはもってこいだと思ひ、ほほえましくその光景をはるかは見ている。

そんな子供達が寝静まった夜更け。はるか達の寮(りょう)に向け進行してくる不穏な気配に、正友が敏感(びんかん)に反応した。

「さっそくのお出ましたな。お前ら一体、何者だ!」

そう言い、寮の駐車場へ飛び出した正友が、押しかけてくる敵を出迎える形となった。駐車場の周辺(しゅうへん)に風の気流(きりゅう)が沸き起こり、近隣(きんりん)からは切り離された世界となった。

それは、正友が自分の力を用いて作り出した空間で、騒ぎがバレないようにする為の物であったのは明白であったが、詩音の元へ敵を行かせない役目も果たしている。出入りできるのは、正友が許した者達だけであった。

「これはお前が生み出した風か？」

正体不明の影が、そう正友に質問をした。

「ああ。出たければオレを倒してからにしな！」

「フッ...やむを得んな。」

そう言って夜の影から姿を現したのは、昼間の男達であった。

「...またお前らか。何の用なんだ？」

ボコボコにされた半日前を覚えてないのかと言いたげな正友。だが、男達はその敗北をものともしないといった感じで、堂々と言った。

「フッ。昼間の我等と同じと思うなよ！！」

「...随分(ずいぶん)と強気だな。何かスゴい武器でも持ってきたのか？」

そう言った正友だが、男達の後ろに控える物の正体を知らずにいた。

第2章へつづく

バトルボーラーはるか
第三集 氷の美少女
第1集・波乱の雨

<http://p.booklog.jp/book/62155>

著者：Ψ (Eternity Flame)英 樹(はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ<http://profile.ameba.jp/jjmmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame)秋乃空

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします

<http://p.booklog.jp/book/62155>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62155>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ